

審査の結果の要旨

氏名 山田桂子

本論文は、19世紀末から20世紀初頭におけるインドのアーンドラプラデシュ州アーンドラ地域におけるアーンドラ地域主義の形成をディスコース分析と、現実の地域運動の展開の両面から考察したものである。英領インドにおける地域主義の展開は第一に英領期の管区、第二に言語州の形成として問題にされる。本論は言語州自身が地域を形成するのではなく、そのなかの一地域が自らをその属する民族集団の中核として認識することから始まるとする。テルグ語圏はデルタ地域と割譲地とよばれる乾燥地域、それ以外からなるが、本来はマドラス管区に編入され、民族主義においても地域主義においてもタミル語圏の一辺境としてしか認識されなかったが、オリエンタリストが古代アーンドラを発見し、その始原、もしくは中心を沿岸デルタ地域に求めたことからアーンドラ地域概念が成立した。オリエンタリストのアーンドラ人概念はニヨーギ・バラモン及びそのパトロンであるザミーンダールらのアイデンティティ形成に理論的基礎を与えた。第一に地域語としてのテルグ語の口語化・近代化が、ヴィーレーサリンガムによってなされた。第二にラクシュマナ・ラオがインド古典とオリエンタリストの業績を折衷した『インド史概説』を記して、インド人のインド史の概念を形成するとともに、その中にアーンドラ人を位置づけた。第三にこれらの知的営為の上に、ヴィーラバドラ・ラオの『アーンドラ人の歴史』が執筆される。これはアーンドラ人を人種的にはアーリヤ人の混血種であり、ヴァルナの面ではバラモンとクシャトリアの混血であり、宗教的には仏教徒がヒンドゥーに改宗したものとしてアーンドラ人の雑種性が強調され、その雑種性ゆえに優越した存在であるとする。ここに地域形成の正統性を示す書としての最初のアーンドラ地域史が形成された。

20世紀はじめに、アーンドラ運動が始まる。アーンドラ運動は基本的にはテルグ言語州の形成を目的とするものであり、デルタ地域の地域エリートに担われていた。アーンドラ人の存在を示威し、その現実の後進性をイギリス植民地主義に帰した点において、それはアーンドラ地域主義とインド民族主義を結びつける意味をもった。しかし、同時にそれはタミル人との対立、同じテルグ語圏である割譲地など非デルタの経済的後進地域とデルタ地域の対立、デルタ内部における階層対立を惹起する。1920年代以降ではカンマなど、アニカット（堰）建設により新たに経済実力を獲得したデルタ部の非バラモン農民エリートがアーンドラ地域主義を継承していく。ハーヴァイヤ・チョウドリの『カンマの歴史』は、カンマをテルグ人の中心とし、テルグ人をインド人の起源であるとまでしている。その論理の基軸は『アーンドラ人の歴史』の著者が指摘したアーンドラ人のハイブリッド性であった。

本論はテルグ語の直接資料の丹念な読解、分析を基礎としており、これまでインド史においてほとんど注目されていなかったアーンドラ地域の地域形成を論じた、世界レベルでパイオニア的な論文とみることができる。その分析、叙述においてインド、アーンドラ、カンマとして地域がしだいにそのアイデンティティを獲得形成する形を、思想表現と運動表現という多重的に論証したことは高く評価できる。その結論である従来の言語州とナショナルリ

ズムを対抗軸におくインド民族主義研究の批判、歴史的アイデンティを基礎とする地域の形成の主張、またアーンドラ運動をめぐる多重的な対立点を、タミルとの対立、テルグ語圏内部の地域的対立、デルタ地域内部の階層的対立などきめこまかく叙述分析をくわえた点は、すぐれて創見にみちている。以上の論述は同時に 90 年代以降、インド史研究史上展開されている周辺地域のナショナリズム運動研究の傾向に正しく位置づけることができる。

しかしながら、本論は地域形成の主導層であったアーンドラカンマの主張と運動を主軸として論じたために、テルグ地域全域の社会的経済的分析に欠け、カンマ層などの擡頭、その主張の形成、その運動過程のダイナミズムを十分に説明できているとは思われない。またそれぞれのテキストのディスコース分析においては、きわめて精緻であるが、その頒布、購読者層の分析については論じられていないために、影響力についての疑義が否定できないなど今後の課題としての問題点を残している。

以上の問題点にもかかわらず、本審査委員会はその創見性をとくに評価し、本論文は博士(文学)の学位にふさわしいものと判断した。